

## 灰香

おうどう  
桜藤  
なか  
仲

その日は千葉の片田舎の火葬場にいた。  
なんともいえない灰色がかった煙が、長い不気味な煙突  
からもくもくと静かに湧き上がっていた。

(大丈夫？ 熱くなかった？)

(……)

(熱くなかったよね……)

(……)

私は今にも腰が抜けそうなほど落胆し尚早していた。  
今からお話するのは最愛の祖母の収骨ほほあけまでの切なくて  
辛いリアルな心情を吐露している。しかし、その一方で私  
自身の生き方をより強くし、大事な何かを教えてくれたよ  
うに思っている。人は誰か大事な人を失った時、深く暗い  
海の底に沈んでしまうかの如く苦しみ、後悔の念に晒され  
る。それがだんだんと薄れ、何マイルもの海底から地上に  
上がってこられるのは亡き人との思い出しかない。時間の  
必要な場合も少なからずあるだろう。

その時の身体的負担と精神的疲労は計り知れない。

あの日、あの時の自分の記憶に残ったものだけが立ち上  
がる支えとなる。それ以上にこの世で悲しみを癒すものが

いる。昨年一〇五歳になる祖母が風呂場で転倒し左大腿骨  
を骨折してしまった。しばらく入院していたが高齢という  
こともあり手術はせず一ヶ月ほどで家に帰ってきた。それ  
から寝たきりになった。それでも私は祖母の元へ通った。

元々、働き者で若い時分から動くことは好きだったと聞  
いていた。まさに明治生まれの典型的な女性ではないかと思  
う。足腰が強くて畑仕事から家事全般を引き受けて私達家  
族を助けてきた女性だった。そしてどんなことでも我慢強  
い。多少のことではめげないし、婿である私の父の小言に  
対してもいちいち目くじら立てることなく、ひたすら黙っ  
て聞き、その場をさらりと受け流す。一言、二言言っても  
いいだろうとこちらは思うことでも

「いいんだよ仲ちゃん。言い返してたらきりがないでしょ。  
それなら、はいはい、と言っておしまいになった方がいい  
んだよ。言い返してまた言われたら面白くもないでしょう」

よく父をわかっているからだ。他人と長く暮らすのはど  
ちらかが引くことが大切なんだと私はその時知った。

いくつか町を通り田園地帯を抜け、だんだんと九十九谷  
の山々が遠くに見えるようになった。峠を下った先が幼少  
期まで暮らした大多喜の私の故郷である。もうすぐ着くと  
いうところで今までぐっすり寝ていた春子がふと目を覚ま  
して

「ママ。おばんば起きてるかなあ」

あるのだろうかと私は自分自身に問いかける。

(淋しいよ……)

(……)

(会いたいよ……)

(……)

(苦しいよ……)

(……)

(恋しくてたまらないよ……)

(……)

(抱きつきたいよ……)

(……)

でももう、それは叶わない。絶対に。

それは突然思い立った偶然であった。予定はなかった実  
家に何故だか慌てて支度をし始めていた。まだ五歳の娘春  
子を連れて。

私が嫁いだから、かなりの年数が経つが、月に一度は顔  
を出しに行っていた。子供が生まれてからもそれは変わら  
ず今も続いている。実家では両親と祖母が三人で暮らして

と心配そうに言った(おばんばと呼ぶようになったのは、  
大おばあちゃんがうまく言えず、最終的に今の呼び名に  
なった)。

実家に着いたとたん、いの一歩に勝手口に飛び込んで  
いった春子だったが、台所の母には目もくれず奥の部屋に  
飛び込んだ。

私も春子に続きそっと祖母の部屋に入った。

「おばあちゃん、私だよ、仲だよ」

眼は開かない。ぐっすり寝ている様子だ。春子も

「おばんば、起きて」

そっとベッドの柵から祖母の手を握った。そして私と目  
くばせをし、部屋から出て行った。

私はしばらく祖母の傍で手を握り顔を見つめた。それか  
らタオルを温め、祖母の顔を拭いてあげようと思い、目頭  
にタオルを当てた。

「おばあちゃん、お顔拭くよ、気持ちいいよ」

声をかけながら起きてくれるのを期待したが一向に目は  
開かない。夢の奥底に入ってしまったように滾々と眠り続  
ける祖母であった。

と、役場の鐘がお昼を告げ、程なく母がお盆に少しばか  
りの昼食を運んできた。

「さあ、おばあちゃんお昼だよ、食べれるかな」

祖母の好きなカレーライスに黒豆、私に来る途中で買っ

てきたマグロの刺身を介護ベッドのテーブルの上に置いた。少し頭を起こして目が開くのを待つ。

「ほらほら、仲ちゃんが来てくれたよ、起きなくちゃ！」  
その時だった。

うつすらと目が開いたのか、こちらを見た感じがした。私はすかさず声を掛けた。

「おばあちゃん、仲だよ。今日は来るつもりじゃなかったんだけど、会いたくなって来ちゃったよ」

そういうと、薄めに作った味噌汁をスプーンで少し飲ませた。喉が動いてごっくんしたのがわかる。

「もっと飲もうね」

何口か水分を摂り、カレーをほんの気持ちだったけど口にしてくれた。

あつあつの緑茶の好きな祖母であったから気を付けながら飲ませた。案外水分は飲んでくれてほっとした。

しかしそれ以上は口を開かなくなった。またうとうと夢の中へ戻ってしまったのだ。

私は幼い頃の記憶を辿っていた。

両親は共働きだった為、祖父母が変わって面倒をみてくれた。私は三歳違いの姉妹の妹でとんでもなくおばあちゃん子であった。

よく保育園を休んでは家から三十分程歩いたところにあ

「早く食べたいな」

「そんなにかぼちゃ好きかい仲ちゃんは」

「うん、おばあちゃんの作ったの甘くて美味しいもん」

そんな話をしながら私の小さな口にたくあんを一切れ入れてくれた。

私は祖母の顔を見ながら嬉しいのと美味しいのとで満面の笑みを浮かべた。

そしてカラスがねぐらに帰る頃、引っこ抜いた枝豆やら人参やらを一輪車に山盛り乗せ、来た道をまた三十分かけて家路に向かう私達であった。

そんな私も中学生になり、学校の英語発表会に出る日の朝。緊張して食事も喉を通らぬ私に

「仲ちゃん、そんな顔してないでおおむし、かんまえるんだよ」

「なにそれ」

「くよくよしないで堂々としていなさい。なんとかなるよっていう昔の人の例え話だよ」

いつもよりきりっとした祖母の目つきが私をはっとさせた。

「おばあちゃんはこの言葉でどんな時でも乗り越えて来たんだよ。だから仲ちゃんだって大丈夫。元氣出せ、元氣出せ！」

いつものリズム調に励ます祖母に

「昔の人って江戸時代とか？ 面白い言葉だねえ」

る畑にいった。

「ほら仲ちゃん、ちゃんと掴まらなくちゃ、落ちちゃうよ」  
「はい」

一輪車の上にちよこんとしゃがんで両端をぎゅっとつかまっている私と、かたや祖母は背負い籠の中に鎌や鍬、肥料に莫塵ごぞ、大事な昼のおにぎりまで背負っている。そのうえ暴れる私をバランスよく一輪車を押して砂利道を三十分も歩かねばならないのだ。今思えばなんと過酷なことだろう。

畑に着くと息つく暇もなく鍬で土壌を生らしサクを作っていく。私はというと、のんびりと莫塵の上に寝っ転がり、流れる雲を見ながらうとうとしたり、天道虫てんどうむしや蝶を追いかけた。広い畑の真ん中で迷子になり無我夢中で祖母の白い割烹着姿を探し、自分よりもうんと背丈が高い葉っぱの森を抜け、土壌いんげんのそばで作業をしていた祖母を見つけたことを今でも忘れない。祖母の胸に飛び込んでわんわん泣いた。

泣きながら顔を上げたら優しい祖母の顔があり、安堵したのか私はさつきよりもっと強く抱きついて甘えた。

お昼になると、梅干し入りのおむすびにたくあんの漬物で一休みをする。

「ねえ、おばあちゃん、かぼちゃはいっ採れる？」

「そうだのう、もう少したたなくちゃ大きく育たないなあ」

と適当に返した記憶があったが、今でもこの「おおむしかんまえるな！」という言葉にはどれほど勇気づけられてきただろう。弱虫の私には偉大な言葉である。

大人になったある日、台所のいつもの座椅子に座った祖母は

「仲ちゃん、私とあんたは繋がってるんだよ。なんにも話さなくたって心がわかつちゃう。そう思うでしょう、仲ちゃんも」

いつでも穏やかな祖母だが大事なことを伝えるときは円らな瞳が鋭い。私は突然そんなこと言われて正直驚いたのだった。が、妙に安心感を覚え、

「私もそう思うよ」

と返答してあったかい気持ちになった。

それから四、五年は経っただろうか。

神妙な面持ちで祖母は言った。

「焼かれたら熱いだろうなあ……。嫌だなあ」

窓の遠い景色に目をやりながら。それはどこか不安そうにも見えた。が咄嗟にそんな事を言われたものだから

「そうだねえ……」

としか返すことしかなかった。

「死んだら終わりだあ……」

言葉少なにそう締めると切り替えるように座椅子を起こして熱々のお茶を口に含んだ。

台所には私と祖母のほかには誰もいなかった。走馬灯の如く、私の脳裏に焼き付いた祖母との記憶が浮かんで消え、また記憶の海馬から溢れてくるのであった。ふと我に返ると六畳間の祖母の部屋は壁掛けテレビの雑音だけで、そよそよと気持ちの良い風が入ってくるではないか。

祖母の手を握っていた私はなんと祖母の髪が欲しくなり、ほんの少しばかり部屋の隅にあった鉢を当てる頂戴した。それを急いで傍にあったテッシュに包みポケットにしまった。それから携帯のカメラに祖母と一緒に手を繋ぎ写真に収めた。何故だかわからないが勝手に体が動いた。本能がそうさせたともいうのか、今でもあの時のことはよく覚えていない。

そんなことをしていると母が台所から私を呼ぶ声があった。「すぐ来るからね」

そう祖母に声を掛けた。二十分程度母と話し込んでいたが、何やらその間春子が私の手を何度も引きに来た。最初は適当にあしらっていたが、一人遊びにも飽きたのだろうと重い腰を上げ、祖母の部屋の引き戸を静かに開けた。

そして、凍り付いた。すでに祖母はこと切れていた。「おばあちゃん、起きてー！」

夢から覚めてしまった。

ぼかんと碧い空を見上げる私にそろそろお骨上げの時間だと夫が声をかけてきた。

震えるからだで祖母の小さな身体（お骨）を目にした時、私は卒倒しそうになった。一〇〇歳にしてとでもしっかりしているお骨だと火葬場の方が話されていた。

それと同時に私は懐かしい匂いを感じていた。それは祖母の匂いであった。

骨になり、灰になった今、最後の最後まで姿は見えずともすぐそこに祖母がいると感じた。

灰には一人、一人匂いがあるって人生の重みがそこに詰まっているのではないかと思う。

祖母の魂は私の心で生き続ける。決して終わることのない無償の愛を注いでくれたことに感謝したい。

実家の定位置にはもう祖母はいないけれど、私はきっと強くなる。

あの時の祖母の微笑みや、あったかい手の温もりを記憶から引つ張り出してこれからの人生の荒波を超えていこう。少々泣き虫だっというじゃないか、おおむしかんまえながら生きていこう。

祖母を想い出すたびに涙がぼろぼろ止まらない。仕方ない。逢いたいけれど逢えないのだから、泣くしかない。

声にならない言葉をふり絞り母を呼んだ。「嫌だー、おばあちゃん死なないでよー」私は夢中でベッドに上がり祖母を揺すった。「起きて、眼を開けて、お願いおばあちゃん」頬を何度もさすって呼んでみたが起きてはくれなかった。子供のように泣きじゃくり大声で泣いた。

ほんの二十分前までは目元も動いていたのに正に時が止まってしまったというのはこのことかと実感した瞬間である。

奥座敷で春子の遊び相手をしていた父が私の半狂乱な声を聞いてやってきた。

「もうおばあちゃん、頑張ったよ。ゆっくり寝かしてやんなよ……」

私は祖母の頬にほおずりをしたまま、父に目をやった。父は私の取り乱す姿をなだめる様に涙をためてそっと部屋を出た。

私は大好きな大きな手をさすった。二度と握ってくれなけれどあのやわらかくてあったかい握手を思い出して手を繋いだ。そう、たった数十分前の祖母の温もりを感じたくて。

動かなくなった祖母のすべてが愛しくて、ただただ、いとおしくて……。

その夜祖母の懐に入って泣く夢を見た。顔を上げた瞬間

しかし私にはまだやらねばならないことがある。

子育てをしつかり終えるまでは祖母には会えないのだ。

あの時と同じ見上げた蒼く澄んだ空と雲をまた見上げて、前に進むしかない。

ありがとう、おばあちゃん。

私生きるよ……。

またね。



桜藤 仲 ————— おうどう なか

1968年生まれ 千葉県出身  
1男3女の母  
訪問介護士として従事したのち、現在小説、エッセイを手がける  
生、死、命についてのエッセイを得意とする  
2000年「温もりのなかで」文芸社より出版